

保育のヒント～「科学する心」を育てる～

保護者に伝える工夫～納豆作り～／社会福祉法人砂原母の会 砂原保育園

子どもたちの取り組みを保護者にどのように伝えて、共有していますか？

園だより、ポートフォリオ、ドキュメンテーションなど、各園さまざま工夫をされていることと思います。

保護者との連携の工夫により、子ども自身が保護者に「自分で伝える」姿に変容していった事例をご紹介します。事例からは、連携の工夫と共に、子どもたちが、納豆への好奇心・意欲を高めていく過程や体験の深まりを読み取ることができます。



納豆作り／3～5歳児

米の収穫後、藁に興味をもった子どもたち…。

ある日5歳児が、絵本「わら加工の本」「しょうたとなつとう」「おまめのはなし」を見た。子どもたちは、「大豆と納豆菌で納豆ができること」を知る。そして、納豆の絵本を参考に納豆作りをすることになった。

納豆菌は、40℃前後の温度を約24時間保温し発酵させること、その後2～3日冷蔵庫で熟成することが必要ということを知った。

子どもたちは、作り方や準備するものを自分たちで調べて、紙に書きだしていった。

保育者はわらづと作りの様子を「今日のニュートン[※]」で保護者に伝える。



※今日のニュートン…日々の子どもの姿を写真とコメントを添えて保護者に発信しているもの（画像クリックでPDFが開きます）

湯たんぽ持ってきたよ

- ある日、Yちゃんが家から湯たんぽを持ってきた。そして他にも2人が湯たんぽを持ってきた。
- 3人は、保温するには湯たんぽが必要で保育園にはないことに気付き、自分の判断で保護者に「納豆作りに使うから湯たんぽを持っていく」と説明して、湯たんぽを持ってきたのだ。この出来事を通して、子どもたちの納豆作りへの気持ちの高まりがうかがえた。

納豆づくりに向けて

- 保育者は、出版社（農文協）に電話をし、食中毒対策について教えてもらった。納豆菌は熱に強いので、わらづとを沸騰した湯で20分煮沸すれば納豆菌以外の雑菌の繁殖を防ぐことを確かめ、いよいよ実行することにした。

湯たんぽってあったかいなあ！／2月3日

- 午前中に納豆を仕込みすぐに保温。温度計を計る。始めは低かった温度も徐々に上がってきた。午後には納豆の様子を見る。みんなで計り、表に記入していく。夕方みんなで観察。温度は41℃
- 「えー全然上がっていない！」
「（わらづとを触りながら）温ったかーい」



（画像クリックでPDFが開きます）

- 「湯たんぽもまだ温かいよ！」変わらない温かさが肌でも感じられる。
- 「湯たんぽってすごいね」すると「なんかちょっと臭くない？」という子どもも出てきた。匂いも少し変わってきた。
- 今日のニュートンを発行、「納豆作り」が始まったことを保護者に伝える。



✿ うまくいったら足の匂い！／2月4日・5日

熟成1日目

おそるおそる新聞紙を開き、わらづと大豆を試してみる。

- 「うわー臭い！！」箸で豆をつまむと、ネバーっと糸が引いた。
- 「できている！！」と、子どもたちは嬉しそうだ。

Iちゃん：「本当に納豆菌がいたんだ」と、自分に言い聞かせるように友達に話していた。

熟成2日目

わらづとを冷蔵庫から出して、まずは匂いを嗅ぐ。

- 「まだ臭いー」「なんかこの匂い。嗅いだらことある気がする」

保育者は「成功したら足の匂いがするらしい」と、聞いていたことを伝えた。

- 「足の匂い？」と言いながら足の匂いを確かめる。
- 「いつも食べている納豆とは違うなあ」「コーヒーの匂い？」「いや、なんか違うよー」

✿ 熟成3日目わらづと納豆を食べよう／2月7日

- 納豆を熟成させること3日。ついに自分たちで作った納豆を食べることにした。まずは匂い、「納豆の匂いになってるはず！」3日間の匂いを比べると、日に日に臭みが無くなり良い香りになっているように感じる。一口ずつ食べてみる。
- 「ちょっと苦い」「でも美味しいよ」「これが一番美味しい」自分たちで作ったから、なおさら美味しいと感じるこどもたち。



✿ 見て見て！糸が伸びるよ！／2月7日

- 納豆を食べていると、子どもたちは納豆の「糸」を使って遊び始めた。
- 「こんなに長くなったよ」「私の背より高くなった」「もっと強い糸を作ろう！」と言いながら、たくさん混ぜる。
- 「どこまで伸びるか？試してみよう」「すぐに切れちゃう…あんまり伸びないな」ものさしを用意したが、途中で切れてしまい計れない。

✿ 納豆糸引きオリンピック／2月14日

- 「納豆の糸が面白い」という子どもたちのこの一言から、「納豆糸引きオリンピック」をすることになった。
- 5歳児が作ったわらづと納豆、市販のわらづと納豆、経木納豆やパックの納豆、保護者が買ってきてくれた納豆で比べた。
- 黒い紙を敷いてその上に糸を伸ばしてメジャーで長さを計った。子どもたちは、納豆の糸が伸びる様子を期待してじっと見ていた。

- 市販の物は糸がよく伸びるが、自分たちで作った納豆の糸はあまり伸びなかった。
「何回やっても駄目だ」「混ぜると強くなると思ったんだけど」その違いに驚いて何度も試していた。
- 「もしかしてこれが納豆菌？」糸はとても細くて見えづらい。指で触るとネバネバするので存在することは分かる。時間が経つと白くなり固まることに気付いた。

だい2かい [2014年2月14日]

なっとういとひきオリソックス

① きょうき 経木	3い	900 cm
② ヒョウシルゲン パック	2い	1050 cm
③ すひら あらぐと		20 cm
④ かんぱんじん (にんげんじん)	1い	1289 cm
⑤ ぶくぶく あらぐと		155 cm

✦ 振り返って

- 興味や好奇心が子どもたちの活動を深めていく。子どもたちは、保護者に話さないではいられない様子だった。「本当に納豆菌ができるのだろうか？」という素朴な疑問が、子どもにも保育者にも保護者にもあった。子どもの自発的な行動（湯たんぽ）が加わって、納豆を作りたいという思いは、三者の共通の思いになった。子どものやってみようという意欲にプラスして、興味、関心をもってくれる保護者の姿勢がより活動を充実させてくれた。
- 「藁の中に納豆菌が住んでいる」という、絵本から得た情報に疑問をもちながら始まった納豆作り。藁の力で大豆が納豆になり、納豆の糸を使った遊びも楽しんだ。活用の仕方が分からず捨てていたかもしれない藁が活躍し、『一粒万倍※』の意味を自分たちの遊びの中で感じる活動となった。
- 保育者は、納豆菌もスーパーで売っている物だと思っていた。子どもと一緒に納豆作りを調べていくうちに、藁にある納豆菌のことや糸のことを楽しみながら準備や計画を立てることができた。子どもたちの「おもしろい」「楽しい」「不思議だ」「もっと調べよう」「こうしてみようよ」などに保育者も同じ気持ちになり、寄り添うことができたと思う。

※一粒万倍…「一粒の粒が万倍にも実る稲穂になるという意味である。わずかなものが非常に大きく成長することのたとえや、少しでも物を粗末にできないという気持ちを表す」（デジタル大辞泉より引用）園の栄養士が子どもたちに教えてくれた言葉。子どもたちも保護者も保育者も興味をもった言葉であり、米作りの取り組みから大事にしてきたこと。園の栄養士が子どもたちに教えてくれた言葉。子どもたちも保護者も保育者も興味をもった言葉であり、米作りの取り組みから大事にしてきたこと。

✦ 参考図書

- [「わら加工の絵本」編：宮崎清、絵：水上みのり、出版：農文協](#)
- [「しょうたとなっとう」写真・文：星川ひろ子・星川治雄、原案・監修：小泉武夫、出版：ポプラ社](#)
- [「おまめのはなし」編・出版：農文協](#)
- [「なっとうの絵本」編：渡辺杉夫、絵：沢田としき、出版：農文協](#)

無断転載を禁ず。引用する場合は右記を必ず明記願います。「(C)公益財団法人 ソニー教育財団 ソニー幼児教育支援プログラム 幼児教育保育実践サイト <http://www.sony-ef.or.jp/sef/preschool/>」